

---

# アイルランド文芸復興運動とクアラ・プレス

～母なるものへの帰帰～

吉津成久

アイルランド人は、古代ケルトの偉大な地母神ダーナを祖とする民族トウアハ・デ・ダーナと呼ばれるが、彼らは、現世において屈辱的な経験をしてきた自分達の国土を、心ならずもかつての栄光の身を卑しい身にやつした「母」なるものになぞらえてきた。アイルランド文芸復興期の上演劇である W.B. イェイツ作『キャスリーン・ニ・フーリハン』における同名の主人公は、「イギリスに虐げられたアイルランドの亡霊」の姿であり、1798年ある農家を訪れたこの老婆は、明日結婚する青年マイケル・ギレインに自分の窮状を訴え、彼にアイルランドを愛する心を起こさせる。そして、マイケルは、花嫁を残してこの老婆に従って行く。これは、地上・現世に対する、死んだ母なるものの霊的世界の勝利を意味する。

本論は、イェイツを中心とするアイルランド文芸復興運動を支えたクアラ・プレスの出版物を主要資料として、標記テーマについて論じるものである。なお、梅光女学院大学図書館にはクアラ・プレス出版全77巻がそろっている。

## 第1章 アイルランドにおける母なるもの～栄光と屈辱

アイルランド人は偉大なる地母神ダーナ（ブリギッド）を祖とし、己が国土を、かつての栄光の身から心ならずも卑しい身に墮落していく「母」あるいは「女」なるものになぞらえてきた。エドナ・オブライエンは、『わが母なるアイルランド』に記している——「アイルランドはいつでも一人の女、母胎、洞窟、雌牛、ロザリーン、雌豚、花嫁、娼婦、そしてい

うまでもなくやつれ果てたベアの妖婆にたとえられてきた。」<sup>(1)</sup>「ロザリー」はゲール語の古詩「わが黒髪のリザリー」(Dark Rosaleen)に歌われている女性で、辛苦と悲哀の歴史を背負ってきたアイルランドそのものを体現する。また、「ベアの妖婆」は、八世紀の詩に歌われている老いて死を迎えんとする豊饒の女神である。19世紀、アイルランド詩人ジェームズ・クラレンス・マンガン (James Clarence Mangan) によって、ゲール語から英語に訳された「わが黒髪のリザリー」は、悲運の女王ロザリー (アイルランドの象徴) に忠誠を誓って戦いつづける兵士 (アイルランド国民) の歌である。

春を祝う2月1日は、アイルランドのキルデアに僧院を開いた女聖人ブリギッドの祝日である。彼女は、アイルランド人の祖神で治癒の女神ダーナのなりかわりであるとされる。聖ブリギッドの前夜祭(1月31日)において、人々は野に生える灯心草(藺草、rush)で聖ブリギッドの十字架を作り、納屋や台所にかかる茶色に枯れた旧年のクロスを緑のみずみずしい今年のものに掛け替え、一年の豊作を祈る。

アイルランドが八百年にわたり英国によって支配をうけるきっかけになったのは、1166年、時のアイルランド王ダーモット・マクマローが、我が身の危険から時の英国王ヘンリー二世の援助を求めたことである。ヘンリー王の部下で、「ストロングボウ」(強弓伯)の異名を持つ敵将リチャード・ドゥ・クレアが、マクマローの長女オイフェ(またはイーファ Aoiffe)との結婚と王位継承権付与を条件にアイルランドに乗り込み、これを征服、後のヘンリー二世による屈辱的支配への道を開いた。現在、ダブリンのアイルランド・ナショナル・ギャラリーに陳列されている「ストロングボウに略奪されるアイルランドの娘オイフェ(イーファ)の図」は、アイルランドそのものの敗北を表すものである。オイフェは、「黄泉の国」の誇り高き王女オイフェ(イーファ)のなりかわりである。今の北アイルランド、アルスターを舞台にした神話に登場するク・ホリンという英雄が立派な戦士になるという話は有名である。その修行の道中には、影の国(黄泉の国)の王女にして女戦士オイフェが、動物に化けたりして、ク・ホリンの力を

---

試しながら、ある時は彼に恋をし、退けられて復讐をしたりして、ある意味では彼を育て、彼に野生の力ワイルドパワーを備えさせていく。そして、彼女はク・ホリンの子供を宿す。だが、ストロングボウに嫁したオイフェにかつての誇りはない。

ジェイムズ・ジョイスは、『ユリシーズ』の冒頭の場面で、マーテロウ・タワーに牛乳を運んでくる老婆を「母」なるアイルランドになぞらえる。「牝牛の中の絹物 (Silk of the Kine) にして貧しい老婆 (poor old woman)。これがむかし彼女に贈られた名前だ。さまよい歩く皺くちや婆あ。いやしい姿に身をやつた不死の女神が征服者と気ままな謀反人に仕える。両方になぶられる寝取られ女。」<sup>8)</sup>「牝牛の中の絹物」も「貧しい老婆」も、イギリスの圧政に苦しむアイルランドの象徴ないし化身で、バラッドに歌われる。前者は、土地も住まいもなく森をさまよう美しい牝牛。後者は、自分のために命を捨てる若者に会えば絶世の美女に変身するが、イエイツはこの口承を基にして一幕物の劇『キャスリーン・ニ・フーリハン』を書いた。<sup>9)</sup>

## 第2章 イェイツとアイルランド文芸復興運動、および

ダン・エマー・プレス (The Dun Emer Press)、

後にクアラ・プレス (The Cuala Press) について

アイルランド文芸復興運動は、19世紀末イェイツを中心に起こった。古代ケルト神話、民話、そしてそれらのヒーローを掘り起こして、英語で書き表し、それを特に舞台にのせる演劇活動をとおして、アイルランド国民に民族文化のルーツを意識させ、誇りを抱かせる理念を貫いた。それが、政治的な民族独立運動と相まって、1922年のイギリスからの実質的な独立を導いたといえる。そして、このアイルランド文芸復興の理念は、こうした文学だけでなく、その文学作品を世に送り出した私家版出版社の本の装丁に施したケルト工芸にもあったことを念頭に置いておかなければならない。その出版社とは、当初の名前がダン・エマー・プレス (The Dun Emer Press) と呼ばれていたクアラ・プレス (The Cuala Press) のこと

である。クアラ・プレスの前身ダン・エマー・プレスは、1902年、若い女性達の職業訓練と雇用を確保するために設立され、イエイツの姉妹であるエリザベスとスーザンもこれに参加、彼女らが持っていた特別な技能である刺繍と印刷術を活かすことになった。出版社の名前ダン・エマーは、「エマーの要塞」という意味で、その名前は、古代アイルランドの英雄ク・ホリンの妻になったエマー夫人にちなんでいる。彼女は、針仕事と家内工芸に長けていたからである。この命名と出版活動にも、アイルランドの女性、あるいは母なるものの存在感を示す意図が見られ、母なるものの栄光の復元が目論まれているといえよう。1908年、イエイツの妹エリザベスとスーザンがダン・エマー・プレスから分離独立して、新しくクアラ・プレスを設立した。クアラとは、その建物がある county の古代アイルランド名であった。これを機に、イエイツ自身編集に携わり、弟のジャック・イエイツも挿し絵や木版画部門を担当するようになった。かくして、当時の文芸復興運動に参画した作家達の初版本のほとんどがこのクアラ・プレス社から発行された。この77巻の出版物のどれもが、スリムな四つ折り版で、特別に手漉きで製造されたアイルランドの紙にキャズロンタイプの活字で印刷され、自然素材のリネンの背をつけた青または灰色の紙での装丁が施されている。また、出版社の標識図案の載った奥付けや数冊の表題紙には、薄紅色のおしゃれな模様が印刷されている。クアラ・プレスは1969年再編成され、1989年まで営業がつづいた。

ここで、ダン・エマー・プレスおよびクアラ・プレスに印刷された(1)木版図案や表象的模様の意味と(2)ブロードサイドについて考察してみる。

(1)でまず取り上げるのは、No.10 *Twenty One Poems* by Katherine Tynan である。この本は、二つの点で、クアラ・プレス出版本の特徴を最初に表したという意味で重要である。一つは、初めて奥付けにクアラ・プレスのスタッフの名前が載ったことで、以後これは継承される。もう一つの点は、はじめてタイトルページに木版図案が載せられたことで、これも以後のクアラ・プレス出版本のスタンダードとなった。この本には、エリノア・モンセル (Elinor Monsell) による木版図案があり、木の下にエ

---

マー夫人 (Lady Emer) が立っている。エリノア・モンセルは、それまで、ケルト神話に登場するコナハト王国のメーヴ女王 (Queen Maeve) を図案化しており、この図案もメーヴ女王の面影を有している。メーヴ女王は、アルスター王国 (現在の北アイルランド) が所有する超能力の赤牛が欲しくて、アルスターの英雄ク・ホリンとその奪取をめぐる死闘を演ずる魔力を持ち合わせた女丈夫である。しかも彼女は、ケルト工芸術に秀でており、同様な才能を持つエマー夫人にそのイメージを重ね合わせたのではなかろうか。<sup>4)</sup>

No.37 Love's Bittersweet, Translations from the Irish by Robin Flower には、イエイツの妹エリザベスによる線画「アイルランド的風景の中の一本の木」が載り、これが以後クアラ・プレスのプレスマークとして使われるようになった。<sup>6)</sup>

No.11 Discoveries by W.B.Yeats は、ダン・エマー社名で発行された最後の本である。ロバート・グレゴリー (Robert Gregory) による表象的模様は、「襲いかかるユニコーン」で、これはイエイツがもっとも好む表象の一つである。「ユニコーン」というアイルランド人がパブでよく歌う愛唱歌がある。地上にはワニもラクダもガチョウもチンパンジーもいるが、ユニコーン (一角獣) がいないのは、ノアの箱船に乗り遅れたからだ、という「ユニコーン」の合唱ともなれば、お互いに動物の身振り手振りをして大笑いになる。よく観察していると、どうも笑いの対象であるユニコーンは他でもない自分達自身なのである。ノアの洪水の前、ユニコーンを捕らえられるのは、身も心も清らかな美しい乙女であった。箱船に乗り遅れたのは、処女のおおいに誘われ、乙女の膝を枕にし、嬉しさのあまり、泣きながら寝入ってしまったためだと、歌っているアイルランド人がさも楽しそうに語っていた。ユニコーンはケルトに縁が深い。サクソン (現イギリス人) が力のエンブレムとしてライオンを用いるのに対して、ケルトはユニコーンを用いる。イギリス王室の紋章には、かつては盾を支えるサポーターとしてライオンだけが描かれていた。ジェームズ I 世がエリザベス I 世の跡を継いだ時、ケルトの末裔スコットランド人らしくユニコーンを加

えた。また、ユニコーンは、キリスト教において、「聖なる狩猟」におけるキリストになぞらえられ、ユニコーン（＝父なる神と一体）は世界のあらゆる権力をものともせず挑みかかるが、聖母の前にはおとなしくなる、とされる。子沢山のアイルランドにおける息子達の母への過剰依存と聖母崇敬が重なって見えてくる。<sup>6)</sup>

No.23 *Reveries over Childhood and Youth*, 2vols, by W.B.Yeats この『幼少・青年時代の思い出』は、詩人の成長した時代と場所（妖精物語や神話伝説の豊富な村スライゴ）との精神的な雰囲気の中に我々を誘う。幼少の頃、イエイツはグリム童話よりアンデルセン童話を好み、自ら魔法使いになろうと考えたほど神秘思想にあこがれた。やがて若いイエイツは、占術と魔法に心を引かれ、それらの修行者から深い感化を受けた。T.スタージ・ムーア (T.Sturge Moore) による図案「波の中の蠟燭」(Candle in Waves) は、過度な霊的意識と夢想との光で、現実の明るさ（「波」が象徴）をかき消すほどの、エソテリックな神秘思想の明燭（「蠟燭」が象徴）を点じたイエイツの面目を示しているといえよう。この本のタイトルページに配されたもう一つの図案は、星空から跳躍してくる「ユニコーン」で、地上では身も心も清らかな乙女がそれを見上げている。図案のタイトルは、Monoceros de Astris（星からのユニコーン＝The Unicorn from the Stars）である。ところで、レディ・グレゴリーとイエイツの合作『虚無の郷』(Where There Is Nothing) を改作してできた散文劇に『星よりの一角獣』(The Unicorn from the Stars) がある。これは三幕の農民劇で、主役はマーティン・ハーン (Martin Hearn) という馬車製造人である。彼は、馬車の装飾として彫ったユニコーンの光によって催眠状態に陥る。そして「何もなく、誰もいないところにこそ神が存在する。」と信じて、「虚無の郷」にあこがれ、旅にでる。この作品は、イエイツの神秘的傾向を表すプロットをもっているので重要である。<sup>7)</sup>

No.4 *Stories of Red Hanrahan* by W.B.Yeats この中で農家を訪れ、明日結婚するマイケルを誘惑するキャスリーンは、解放させたアイルランドを象徴する老母キャスリーン・ニ・フーリハンである。イエイツの心の

中では、自作の戯曲『キャスリーン・ニ・フーリハン』で、そのキャスリーンの役を演じたモード・ゴンの姿と切り離し難く結びついているようである。アイルランドを力によって政治面で独立させんとする女性闘士モード・ゴンと文芸復興運動によって文芸面で独立させんとする詩人イエイツの対比、それについてのイエイツの苦悩を表す作品である。ロバート・グレゴリーによるイラストは、かつてのアイルランドの四つの王国、アルスター、コナハト、マンスター、レンスター（アイルランドの民話では、「四つの緑の野原」）の上に広げられたトランプの四つのエースを描いており、王国回復の夢が託されているようである。<sup>8)</sup>

次に、(2)として、バラッドとブロードサイドについて述べる。バラッドとは、伝統音楽（トラッド・ミュージック）の一つで、イギリスおよびアイルランドでは、ビートルズやローリング・ストーンズに代表されるブリティッシュ・ロックのルーツといわれている音楽である。歴史の表舞台に登場することのない一般市民が、口ずさむ歌の中に、その時々のお思いを込め、次の世代に手渡し、手渡された人々は、先人から伝えられたその歌に、自分達の時代を投影させていった。それが伝統歌の一つ、バラッドである。バラッドには、オールド・バラッドと、より新しいブロードサイド・バラッド（ニュー・バラッドともいう）がある。前者は、ゲール語（ケルト語）の伝統を持ち、中世以前に成立したものである。これに対し、後者は、16世紀に誕生したもので、印刷技術が普及した16世紀になると、現在の新聞の遠い祖先にあたるブロードサイド（元々発行に際して片面だけに印刷されたので、こう呼ばれた）という情報誌が誕生するが、識字率が低かった田舎の人々にブロードサイドを買わせるために借用されたのが歌であった。つまり、ニュースをバラッド体裁に仕立て、よく知られたメロディにのせて歌いながら販売したのである。ブロードサイドの販売に従事したのは、路上の行商人であるチャップマン（chapman）たちであった。ブロードサイドは、アイルランドでは、最初17世紀に印刷され、18世紀から19世紀初期にかけてダブリンで大変な売れ行きであった。旅回りの歌手たちによって定期市や市場で売られ、大変な人気を博し、100万部も売れた

版もあるという。1918年以降は、ダン・エマーとクアラ・プレスにより再製された。ブロードサイドが伝えるテーマは千差万別であった。現在の新聞の三面記事と大差ない巷の事件から歴史的な大事件を含んでいた。ナポレオン戦争、ロビンフッド伝説、色恋沙汰、殺人や強盗事件、競馬、ボクシング、処刑、誘拐、移民、悲喜こもごもの恋歌、さらには、「カム・オール・イー」(come-all-ye、すなわち、「みんな集まれ」、パブなどでみんな集まって歌う唄)として知られる「語りの歌」などが、このブロードサイドの中に収められている。また、オールド・バラッドを含む、あるいはそれを改作したブロードサイド・バラッドも多くある。18世紀後期以降になると、反権力者的要素や愛国主義的な要素を盛り込んだ「レベル・ソング」(抵抗の歌)が多くなるが、大体において、抽象的な理念より、ある特定の出来事や個人を中心に扱っている。

No.10 (New Series) October 1935 のブロードサイドを一例として取り上げてみる。ウィリアム・B・マクバーニー作のバラッド「ザ・クロッピー・ボーイ」が載っている。「丸刈り組」(クロッピー)と呼ばれるカトリック教徒の団体が、1798年、アイルランド南東部ウエックスフォード州で起こした広範囲な蜂起を背景としている。そして、その蜂起は、既述したイエイツの劇『キャスリーン・ニ・フーリハン』の背景である。アイルランドのために、「丸刈り組」の蜂起に加わった少年が、その前に罪の懺悔をしようと司祭を探しにやってくる、すでに教会を占拠し、司祭になりすましている騎兵隊の隊長、その他のイギリス軍の兵士に捕まり、処刑される、という筋である。この1798年の反乱は、イギリスで産業革命が進行し、フランスでフランス革命が勃発しているこの時代にウルフ・トーンが指揮するユナイテッド・アイリッシュメンが起こした反乱で、「丸刈り組」たちは、この反乱で、自分達の地方を守り戦う農民義勇兵であった。この反乱の最大の意義は、プロテスタントとカトリックが、宗派を超えて連帯してイギリスの支配に抵抗したアイルランド史上唯一の闘争であったことである。反乱軍はフランスの援軍を頼んだ甲斐もなく破れた。反乱を鎮圧したイギリス政府は、1801年にアイルランドを併合し、1782年以来享受してきたア

---

イルランド議会の自律性は奪われ、アイルランドは完全にイギリス連合王国に組み込まれた。また、宗派を超えたアイルランドの国民的連帯が崩れ、後に尾を引く北アイルランド紛争の原因となった。<sup>9)</sup>

このバラッドを、アイルランド作家ジェームズ・ジョイスは、その大作『ユリシーズ』の第11挿話に採り入れている。場面は、1904年6月16日木曜日の、ダブリン市内オーモンドホテル。暇を持て余すダブリンの男達は、ホテルのサルーンに置いてあるピアノを弾き、その演奏に合わせて歌を歌ったり、対話したり、内的独白をしている。ベン・ドラードという男が歌うThe Croppy Boyの一節が流れる。蜂起に加わったウエックスフォード州出身の少年の歌である。「すべては逝った。すべては倒れた。ロスの包囲で父が、グリーンで兄たちみんなが倒れた。さあ、ウエックスフォードへ。俺達はウエックスフォードの若者だ。僕は行かねばならぬ。名前を継ぎ、一族最後の者として。」すると、それを聞いていたユダヤ人レオポルド・ブルームが突然内的独白をする。「俺も一族最後の者。うん、多分俺が悪いだろう。息子がいない。ルーディ。今ではもう遅すぎる。それとも、もし遅すぎないなら？ないなら？もしまだ？」ブルームは、一人息子ルーディを生後11日で亡くしている。子供はミリーという年頃の娘だけである。そして、息子を亡くして以来、ブルームと妻モリーとの夫婦生活は途絶えている。38歳のブルームは、今からでも息子をもうけられないかな？と自問している。だが、今日は妻の男友達が自分の留守中に我が家を訪れているはずで、ブルームは二人の情事を空想して悩んでいる。また、ブルームの、妻と男友達との関係についての悩みは、娘とボーイフレンドとの関係についての心配とからみあい、彼と妻との関係修復のあせりともからみあって、結びつきそうで結びつかない男女の関係が、まるで追いかけてくるようからみあっていく。そこに漂うのは、各人物の、帰属感の喪失から生まれる孤独さである。

この『ユリシーズ』第11挿話は、最も「音楽的な」章である。最も大事なことは、語りの構造そのものが、音楽でいう「フーガ形式」(fugue)に基づいていることである。つまり、いくつかの声と音がお互いに追いかけて

こをし、同じ旋律や響きを、あたかもこだまのように響かせながら進行するのである。ブルームが、ドラードの歌う「ザ・クロッピー・ボーイ」の歌詞を引き取って、わがことに結びつけて内的独白するのもその典型である。それは、上述のように、まるで追いかけてこをするような、あやふやな男女関係のからみあいにふさわしい構造である。

もう一つ、「ザ・クロッピー・ボーイ」の後に、「ジョニー、あなたがわからなかった」(Johnny, I Hardly Knew Ye) というバラッドが続いているが、これはまさにフーガ曲で、ソプラノ、アルト、テノールが互いに追いかけてこをし、同じ歌詞、旋律をこだまのように響かせながら進行する。また、この「ジョニー、あなたがわからなかった」も、『ユリシーズ』第1挿話に採り入れられている。このバラッドは、戦地セイロンでイギリスのために戦い、手足を失い、顔も見分けのつかぬほど変わり果てて戻ってきたアイルランド兵の恋人の姿を嘆く女性の歌である。戦勝国大英帝国は、セイロンの茶畑で収穫される茶の葉を英国内で製茶し、現在に至るまで紅茶産業の担い手となった。そして、故国に帰ったアイルランド兵の多くは、今度は地下組織(例えば、先述の、ユナイテッド・アイリッシュメン)に入り、大英帝国を敵にまわして戦った。このアイルランド人としての根「アイデンティティ」を断ち切られた者の悲しみを主題にして、アイルランド出身の女流作家エドナ・オブライエンは、バラッドと同じタイトルの『ジョニー、あなたがわからなかった』(1977) という小説を書いた。アイルランド人を、「自分が生まれた土地から遠く引き離された鉢植えの花」に例える女主人公ノラは、真の愛を手にしながらか、「わからなかった」ために、恋人を殺してしまう。無惨な姿で戻ってきた恋人を、悲嘆にくれつつも、わが胸に受け入れようとするバラッドの女性に比べれば、現代のノラが陥っている帰属感の喪失の深さがいっそう際立つのである。<sup>80</sup>

### 第3章 アイルランドにおける母(女)なるものの復権

アイルランド文芸復興運動において、イエイツとシング(John Millington Synge)は、神話における悲劇の女デアドラ(Deirdre)をヒ

ロインにした劇を書いた。それを舞台にのせることによって、アイルランドにおける母（女）なるものの復権、とりもなおさず、アイルランドそのものの復権を訴えた。両作品共に、コノール王（イギリスを体現する）に対して、デアドラ（アイルランドを体現する）が死をもってその誇りを固守したこと、それによって、コノール王の支配の及ぶことを阻止し、アイルランド人の自主独立の意義を高めたことを主題にしている。ただ、シングの『悲しみのデアドラ』（Deirdre of the Sorrows）の方が、より現実的で、母（女）なるものの復権をより鮮明に、効果的に打ち出しているように感じられる。シングが舞台の上で効果的に提示しようとしているのは、デアドラが死を賭してでも守ろうとする、アイルランドの森や野原を駆けめぐる「自由」である。その「自由」は、コノール王が体現する宮廷の「権力」と対立するものであり、それを効果的に表現する象徴的場面がある。第一幕で、コノール王が、金貨や宝石類の入った袋を持ってデアドラに会いにやってくると、ちょうどデアドラが森から帰ってくるころに出くわす。彼女は、コノール王とは対照的に、薪にする小枝や木の実を集めて持ち帰ったところである。前述の通り、クアラ・プレスに載った No.4 Stories of Red Hanrahan by W.B. Yeats 中の『キャスリーン・ニ・フリーハン』とともに描かれたロバート・グレゴリーによるイラストは、「四つの緑の野原」（Four Green Fields）であった。

それは、かつてのアイルランドの四つの王国を指し、それぞれの上に広げられたトランプの四つのエースには、王国回復の夢が託されていた。デアドラは、まさに、キャスリーン・ニ・フリーハンとともに、「四つの緑の野原」、すなわち、アイルランドの、「自由」と「自主独立」を体現する女王的存在あるいは女神的存在である。

前述の通り、クアラ・プレスの前身ダン・エマー・プレス（「エマーの要塞」という意味）は、古代アイルランドの英雄ク・ホルインの妻エマー夫人にちなんでいる。同プレスは、若い女性達の職業訓練と雇用を確保するために設立され、イエイツの姉妹であるエリザベスとスーザンもこれに参加、彼女らが持っていた特別な才能である刺繍の技術を活かすことになっ

た。かくして、プレスの命名と出版活動にも、アイルランドの母（女）なるものの栄光の復元が目論まれていた。シングの『悲しみのデアドラ』において、デアドラは、やはり、刺繍の技術に長けており、彼女の豊かな創造力と色彩感覚によって刺繍を施された見事な壁掛けが舞台上に架かっている。その壁掛けには、森や緑の谷間や緑の野原を駆けめぐる三人の若者の姿が描かれている。三人の若者は、やがてデアドラと行動を共にするウシュナの三兄弟を表すのであろう。そのうちの一人、ノイシュとデアドラは連れ添うことになり、コノール王の追っ手から逃れて逃避行を続けるが、最後は、王の奸計により捕らえられ、ノイシュは殺され、デアドラも後を追う。壁掛けが象徴するものはなにか、改めて述べる必要はあるまい。デアドラの側近は、デアドラの技量をこう評価する。

All say there isn't her match at fancying figures and  
throwing purple upon crimson, and she edging them all  
times with her greens and gold.<sup>09</sup>

（人々の姿を想像し、深紅に紫をあしらうなど、あの方にはかなう人はいないとみんなが言っています。そして、あの方は、人物像の周囲を、いつもあの方独特の緑色や金色で縁取りなさるんです。）

註

- (1) E・オブライエン著、岩上はる子訳『わが母なるアイルランド』、ありえず書房、1985、P.7
- (2) ジェイムズ・ジョイス著、丸谷才一、永川玲二、高松雄一訳『ユリシーズ』、集英社、1996、P.38
- (3) 同上

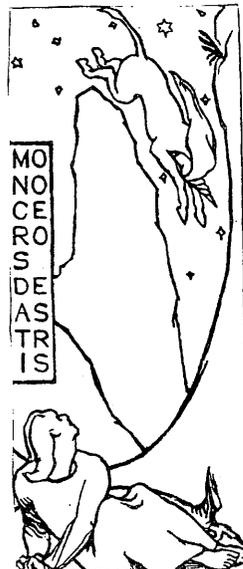
(4)



(7)



(5)



(6)



(8)



(9)

NO. 10 (NEW SERIES) OCTOBER 1935.

# A BROADSIDE

EDITORS: W. B. YEATS AND F. R. HIGGINS; MUSICAL EDITOR,  
ARTHUR DUFF. PUBLISHED MONTHLY AT THE CUALA PRESS,  
ONE HUNDRED AND THIRTY THREE LOWER BAGGOT STREET,  
DUBLIN.



## THE CROPPY BOY

"Croppy Boys" was the name given to those who took part in the Rising of 1798. It referred to their short cropped hair. It appears in a Collection by Garold Malone.

G Am A7

Good men and true in this house who dwell, to a stran-ger bus-chail I

G G7 C G

pray you tell, Is the priest at home or may he be seen I would

D D7 G

speak a wo- rd wi- th Fa- ther Green.

The youth has entered an empty hall; Where a lonely sound has his light footfall  
And the gloomy chamber's cold and bare; With a vested priest in a lonely chair  
The youth has knelt to tell his sins; 'Nomine Dei' the youth begins  
At 'mea culpa' he beats his breast; Then in broken murmurs he speaks the rest.

'At the siege of Ross did my father fall; And at Gorey my loving brothers all  
I alone am left of my name and race; I will go to Wexford to take their place  
I cursed three times since last Easter day; And at Mass-time once I went to play  
I passed the churchyard one day in haste; And forgot to pray for my mother's rest.'

'I bear no hate against living thing; But I love my country above my king  
Now Father, bless me and let me go; To die, if God has ordained it so.  
The priest said naught, but a rustling noise; Made the youth look up in a wild surprise  
The robes were off, and in scarlet there; Sat a yeoman captain with fiery glare.

With fiery glare and with fury hoarse; Instead of a blessing he breathed a curse  
'Twas a good thought, boy, to come here and shrive; For one short hour is your time to live  
Upon yon river three tenders float; The priest's on one—if he isn't shot  
We hold this house for our lord and king; And amen say I, may all traitors swing!

At Geneva Barracks that young man died; And at Passage they have his body laid  
Good people who live in peace and joy; Breathe a prayer, shed a tear, for the Croppy Boy.

## JOHNNY, I HARDLY KNEW YE.

While going the road to sweet Athy,  
Hurroo! hurroo!  
While going the road to sweet Athy,  
Hurroo! hurroo!  
While going the road to sweet Athy,  
A stick in my hand and a drop in my eye,  
A doleful damsel I heard cry;—  
Och, Johnny, I hardly knew ye!  
With drums and guns and guns and drums,  
The enemy nearly slew ye,  
My darling dear, you look so queer,  
Och, Johnny, I hardly knew ye!

“Where are your eyes that looked so mild?

Hurroo! hurroo!  
Where are your eyes that looked so mild?  
Hurroo! hurroo!  
Where are your eyes that looked so mild  
When my poor heart you first beguiled?  
Why did you run from me and the child?  
Och, Johnny, I hardly knew ye!  
With drums and guns and guns and drums,  
The enemy nearly slew ye,  
My darling dear, you look so queer,  
Och, Johnny, I hardly knew ye!

“Where are the legs with which you run?

Hurroo! hurroo!  
Where are the legs with which you run?  
Hurroo! hurroo!  
Where are the legs with which you run,  
When you went to carry a gun?—  
Indeed, your dancing days are done!  
Och, Johnny, I hardly knew ye!  
With drums and guns and guns and drums,  
The enemy nearly slew ye,  
My darling dear, you look so queer,  
Och, Johnny, I hardly knew ye!



“It grieved my heart to see you sail,  
Hurroo! hurroo!  
It grieved my heart to see you sail,  
Hurroo! hurroo!  
It grieved my heart to see you sail,  
Though from my heart you took leg bail,—  
Like a cod you're doubled up head and tail.  
Och, Johnny, I hardly knew ye!  
With drums and guns and guns and drums,  
The enemy nearly slew ye,  
My darling dear, you look so queer,  
Och, Johnny, I hardly knew ye!  
“You haven't an arm and you haven't a leg,  
Hurroo! hurroo!  
You haven't an arm and you haven't a leg,  
Hurroo! hurroo!  
You haven't an arm and you haven't a leg,  
You're an eyeless, noseless, chickenless egg;  
You'll have to be put in a bowl to beg;  
Och, Johnny, I hardly knew ye!